

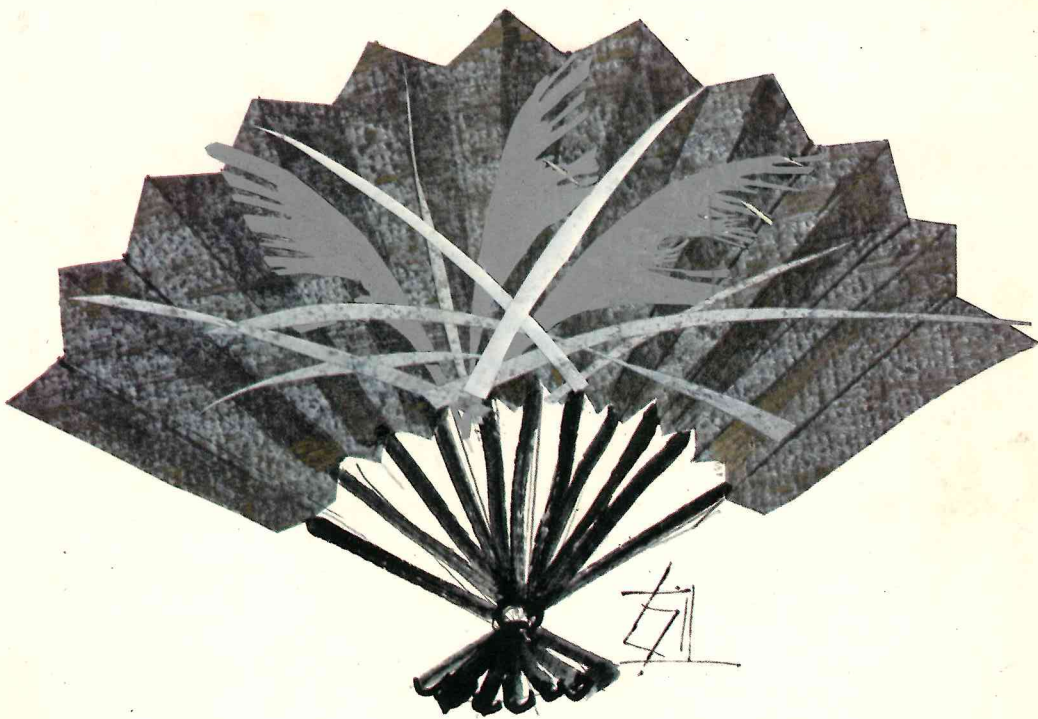
白珠

4-1972

昭和47年5月19日
昭和47年3月20日
昭和47年4月1日
昭和47年5月1日
昭和47年6月1日
昭和47年7月1日
昭和47年8月1日
昭和47年9月1日
昭和47年10月1日
昭和47年11月1日
昭和47年12月1日

白珠

第二十七卷
第三百三十四号



第 27 卷

第 4 号



歌集
ぶらんこ童児

批評
特集

「くれなる」のころ

田中克己

壘中清市さんから第三歌集『ぶらんこ童児』とともに御鄭重なお手紙をいただいた。お手紙は達筆で長いものだが、その一節に「桜井のころはほんとに食べるものもございませんでしたね。『千櫻』の歌集を持って拙宅へおいでいただいた時のことも、まだ目新しい思い出として残っております」と書いておいでである。わたしは途端に苦しかった大和桜井での生活を思い出したが、ふと気がついて、しまっておいた「くれなる」をとり出してみた。本当に二十年近く出してみなかったものである。

わたしの手許に残っているのは、わたしが書いたものだけなので申し訳ないが、昭和二十四年一〇月発行の復刊第一号（通巻第四〇号）から、第六一号までの十数冊で、わたしは桜井から彦根、大坂

さば雲のうろこ薄れてゆくときをあげつらふなし明日の待たるも
かまつかの滴る赤がうごくなし日照りの庭にゐて悔ゆるなし
これらの歌はみな心を打つものばかりである。

山のまの目だまりに咲く龍膽の色にきはまる秋の空なり
仮に半年住まった大和桜井の避病院の一室を出て、暗く将来をながめていた時、わたしを慰めたリンドウの花である。

小さい姪御さんをいたんでの歌のようにだが、戦争中、満二歳の子

を亡くしたわたしには、他人の歌とは思われない。

政を為さず孔子は説きぬ「衆星の北極星に従ふみよ」と
孔子のことはわたしも詩にした。「中国人の星の信仰」というテ
ーマの卒論を書いた女子学生は嫁いでもう母となっている。

千羽鶴折らむといひし子のひとみ雲を映してかがやきてをり
卒論指導でわたしの接する大学生は、ここではじめて真剣な顔に
なる。卒論が書けなければ卒業が出来ず、従って女子学生は結婚も
不利となる。わたしはその弱点を利用して、ひとまず学問的な論文
の仕上げを要求する。こんな年々が何年つづいたろう。壘中先生は
わたしより幸せだ。この「子のひとみ」は大学生よりずっと澄んで
いるからである。

この子らと仲よくなりし蛇の子の短きいのちは我のみ知れり
わたしのゼミの女子学生のもてあそんだ学問は、図書館に製本さ
れて残っており、わたしは花嫁衣裳をつけた彼女に、卒論のテーマ
を思い出させて、あの時以上の熱心さで新家庭を築くことを願って
着席する。去年は十回、今年も何回かそんな場面が展開されるだろ
う。そしてわたしが——神さまの御計画にあれば——退職する日ま
でのあと十一年、同じような年々がつづくだろう。わたしは壘中さ

へと三度転居しながらも、つづけて文や歌をのせていただいているのである。とりわけありがたく思ったのは「大和通信」という堀辰雄さんあての手紙の形式で書いた文章をのせてもらっていることである。今度、堀さんの奥様にお会いしたら、わたしはこの「くれなる」を堀さんにお送りしたろうか、お送りしたのなら読んでいただけたらうかということ伺ってみようと思う。

「くれなる」第六一号によると、壘中さんの第一歌集『天雲』は、このころ発刊されていて、わたしはそれをよんで「声低く、調べの高い仲間の人、本当の歌を作る友人」と壘中さんたちを呼び、最後に「とこしへの眺たらむ川へだて山へだてたる野の涯に見ゆ」という山口実さんの歌を挙げています。わたしの記憶の中では、壘中さん、山口実さん、難波礼二さんという「くれなる」のお三人の差別がもうはっきりしないが、壘中さんの初瀬のお宅を訪ねたり、「くれなる」五〇号の祝の会というので近鉄の高安駅で下車し、山辺の池田道夫さんのお宅へ伺ったことも思い出した。もう少しひまが出来れば、昭和十六年以來欠かしていない日記のその頃のことを読みかえてみよう。

いまわたしは、学年で一番忙しい時期に疲れてきたたになり、そのうえ五十肩（わたしは実は数え年六十二歳なのだ）と齒の治療ということでまじりきっている。『ぶらんこ童児』もいただいたままで、ゆっくり読んでいないのだが、失礼を顧みず寸感をのべる、三節に分けられたこの歌集の中では、最初の節が一番好きである。気がつけば、これが最近のお歌を集めたものなので、壘中さんにも申し上げてよいことだと思ふ。

懶惰なる吾をいましむることばあり冬漸くに極まらむとし

んたちのせて下さった歌を一巻に編んで「戦後吟」という歌集を出版した。その後も日記や手紙のはしに歌を書きのことすことは止めないが、歌集はあれ一冊で十分である。

壘中さん、もっと沢山作って下さい。にせの歌、散文と区別のつかない歌のみの氾濫するいまの世に、あなたの今の歌境は大変貴重なのです。お祝にかえてお願いしておきます。（昭和四十七年一月 辰日、東京阿佐谷にて）

すこやかな詩性

——歌集『ぶらんこ童児』——

右原 彪

冬はみんな温ためあはむと決めてある銀紙は白き音たてにけり
青澄めるエアポケットを越えむとす冬の虚しさが地表を這へり
汚れたる冬雲あつめて己がズボンにつきしごらくさ落とす

△光のごとく▽より

冬あけも近い二月の或る晴れた日、階上の部屋にストローブを点けながら、ほっと窓外の碧空を眺めわたしたとき、瞬間、この第一首が頭に浮かんだ。

歌集『ぶらんこ童児』の著者の人柄がそのまま、例の何のてらいもない人間的な肌の温かさと爽やかな後味が、そっくりすつと素直に入ってきたのである。

まさに△光のごとく▽外延性にあふれ、△光のごとく▽清潔感にみちた第一首、このすこやかな持味は第二、三首にもひきつがれ

社中消息

- 佐藤美知子 「火の傍」五首を『短歌新聞』一月号に発表。
- 島本 正齊 「冬の星座」四八首を『受賞歌人シリーズ第1集』(短歌公論社刊)に発表。
- 清水 良雄 「三峰」十首を『文芸埼玉』第六号に発表。
- 松岡 裕子 「夜の噴水」五首を『短歌公論』二月号に発表。
- 森田 昭二 「古典を現代に生かす」(安田章生著歌の深さ)を『短歌公論』二月号に発表。
- 西畑 実 「離騷」五〇首を『受賞歌人シリーズ第1集』(短歌公論社刊)に発表。
- 藤原 優 「米寿記念歌集」(非売品)を初音書房より刊行。

新入社友

- | | | | | | |
|---|-------|------|-----|-------|--------|
| 林 | 佳谷子 | (住所) | 和歌山 | (紹介者) | 佐藤 美知子 |
| 籠 | 谷 橋之助 | | 宝塚 | | 菊池 美保子 |
| 中 | 安 しな | | 同 | | 同 |
| 伊 | 藤 浩 | | 京都 | | 同上 |
| 堀 | 内 房 | | 兵庫 | | 上月 与一 |
| 植 | 野 綾 | | 吹田 | | 阪上 正子 |
| 岡 | 部 ひさ子 | | 大阪 | | |
| 香 | 山 きみ子 | | 長崎 | | |
| 山 | 田 ぬい | | 兵庫 | | 平田 喜美 |

白珠社清規抄

入社希望者は、氏名・住所・年齢・職業・歌歴を明記の上、入社費百円及び社費四ヶ月分を添えて申し込みのこと。

同人・社友

同人・準同人・社友・誌友を以て組織し、同人・準同人は社友の中から力量充実した作家を推薦する。(同人・準同人規定は、別に定める。)

社費

一カ月社友二百五十円、誌友二百円(申し出により療養者・学生は誌友並)
社費切れの時は、直ちに送金のこと。送金の際は、所属欄名を明記し、なるべく振替を利用のこと。

投稿

社友は毎月、短歌十首以内を投稿できる。但し、毎月一日を以て翌々月号の分を締め切る。誌友は雑誌購読のみとする。

二百字詰の原稿用紙に書き、初めに所属欄名、住所(府県市名・氏名を明記のこと。二枚以上の際は、右肩をとすること。)

添削 一回十首限り(同一歌稿二通同封) 添削料一千円、宛名明記、切手貼附の返送用封筒同封の上申し込みのこと。

火の傍 佐藤美知子

しとしとと摩り寄りて来る古い猫の人のやうにも寂しがるなる
絨緞の唐草文に臥し人間と火の傍にあり馴れし犬まどろめる
母われに身構ふる子のけしさを一つの過程と見るべく堪ふる
眠り落ちむ目蓋に赤き輪が舞へるこの闇迷には今生の境界か
陽と遊ぶごと窓清めぬ和越えむころし
まりの湧くともなくて

—「短歌新聞」一月号—

夜の噴水 松岡裕子

のめりこむやうに時間が過ぎゆくと髪濡れてたつ夜の噴水に
紅葉せる樹々のことばを注ぎつつ空はいちづに海へかたむく
ねんごろに育まれしか美しくみのりて空にあふれる柿
冬の日の幹に胸あて感情の落差しづかにはかりてゐたり
木枯しのしづまれる朝食卓に酢漬けのらつきやうに光るつめたさ

—「短歌公論」第四十三号—

明治記念総合春季歌会案内

- 一、近詠 (未発表一首) 用紙はがき
- 二、締切 四月十五日
- 三、選者 小野昌繁 五島 茂 宮 柊二 橋本徳寿
- 四、送り先 東京都渋谷区代々木神園町 明治神宮社務所 献詠係
- 五、歌会 五月七日(日)午後一時 会場 明治神宮参集殿

靖国神社御創立記念献詠募集

- イ、兼題 鳥に関する一切
- ロ、一人一首 未発表作品 用紙半紙 (初穂料五〇〇円添付)
- ハ、選者 岡野直七郎 鹿兒島寿藏 五島美代子 松村 英一
- ニ、締切 五月十日
- ホ、送り先 102千代田区九段北 靖国神社 弘報課献詠歌係
- ヘ、披講式は六月二十九日御創立記念日当日

編集後記

○冬には毎年、私の家の庭にやつてきて、その澄んだ声をひびかせてるヒタキが、ことはは、この後記を書いて二月十日まで、姿を見せない。これも、暖冬のためかもしれないが、おそらくこのまま春になるであろう。暦の上ではすでにもう春なのである。本号がお手許に届く頃には、わが庭の木蓮も水仙も咲いているかもしれない。いくらかの乱れや遅速はあつても、季節がめぐつていく確かな鼓動を感じて、深いよろこびを覚えるのは、一年中でも二月から三月にかけての時期が一番であるように思われる。空を突きさしている、未だ堅い木蓮の蕾を見ながらあらためてそんなことを思うが、

(安田章生)

わけにはいかぬから、いつも若干を作りためている。本号に発表した四首も、そのうち二首は四四年、他の二首が四五年と四六年の作である。大体、私は、そんな発表の仕方をしている。

白珠 第二十七巻 第四号

定価 二百五十円

昭和四十七年三月二十日印刷

昭和四十七年四月一日発行

豊中市本町三丁目八ノ三六

編集兼 安田 喜一郎

発行者 大阪市北区芝田町九七

印刷者 秋丸 豊

大阪市大淀区豊崎東通三ノ二二

印刷所 新星印刷KK

大阪府豊中市本町三丁目八ノ三六

発行所 白珠社

電話 〇六八・五二・五三六番

振替 大阪 一〇三三九〇番